

# 短編百合

石ころ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※『小説家になろう』にもマルチ投稿しています。

短編百合『ミニトマト』

# 目次



# 短編百合『ミニトマト』

——僕く幽艶な美少女というのは、彼女のような女の子を指すのだろう。

夏海はそんなことを思いながら、ゆっくりと食事を続けていた。優華を眺めた。

学校では彼女と昼食をともにするのが日常で、今日もそれは変わらなかつた。二人とも弁当箱を持参しているのだが、優華はいつも小さな容器の弁当を、かなりの時間をかけて食べている。先に食事を済ませた夏海が、遅々と箸を動かす優華を眺めるのは日課になつていた。

その少食っぷりからも窺えるように、彼女は小柄で痩せた体つきだつた。背も低いほうで、高校生というよりかは中学生、あるいは小学生と偽つても通じてしまいそうな見た目をしている。そして長く艶やかな黒髪と、色白で整つた顔立ちは、誰が見ても美女であると頷ける容姿をしていた。

「……トマト、また残してるの？」

机に頬杖をつきながら、夏海はふつと笑つて問いかけた。

優華の弁当箱の隅つこには、ヘタを取つたミニトマトが二つ放置されていた。彼女の

母親が毎回のように入れていたが、優華自身はどうにも苦手らしい。トマトを食べさせたい母親と、トマトを食べたくない娘。学校の昼食では、いつもその攻防が繰り広げられていた。

「……だって、食感が……あんまり好きじゃないから」

優華はか細い声で、顔を少し下向かせながら呟くように言つた。あのぐちゅっとした感じが嫌いらしいが、わからなくもない話である。ケチャップのような加工品は好きでも、生トマトは無理という人は意外と多いらしい。

「——食べてあげようか」

夏海がそう言うと、優華の表情が途端に明るくなつた。窮地で光明を見つけ出したかのような反応である。どれだけトマトが嫌いなんだ、と夏海はおもわず苦笑をしてしまつた。

「どうぞどうぞっ……」

すす……と優華の纖手が、弁当箱をこちらへ押し出してくる。ほかのおかずは綺麗になくなつていて、ミニトマトだけが悲しげに残されていた。おいしいのに、トマト。

夏海は手を伸ばしたところで、迷つたように静止した。素手で掴むのは、ちょっとどうだろう。そんな悩みにすぐ気づいたのか、優華は自分の箸を差し出してきた。

べつに潔癖症ではないので、他人の食器を使うことは気にしていなかつた。優華も長

い付き合いでそれをわかつてゐるのだろう。自然な動作で、夏海は彼女の箸を受け取つた。

ふだん自分が使つてゐるものよりも、ずっと小さくて可愛らしい箸で、夏海はミニトマトを一つ掴んだ。そしてゆっくりと、広げた口の中に持つていく。

箸が、下の唇に触れた。指の力を弱めると、口内で丸い果実がころりと転がつて舌に乗る。食べ物を運びおえた箸を引き戻す時——ふたたび唇と触れ合い、少しだけ湿っぽく濡れた気がした。

上下の歯で力を加えると、トマトは簡単に崩れてドロリとした感触がもたらされる。酸味と甘味が、唾液を誘つた。ゆっくりと味わつて、それを嚥下する。

ふと優華に目を向けると——彼女はニコニコと、夏海の顔を眺めていた。さあ、もう一つどうぞ。そんな言葉が、表情だけで伝わつてきそうだった。

「もう一つは自分で食べなさい」

「ええーっ!? な、なつちやんが食べてよお……。好きなんでしょ、トマト?」

「好き。でも、あなたも食べなさい」

「そんなんあ……」

今にも泣きそうな声色で嘆く優華。なんとも大袈裟な反応だった。野菜嫌いの子供の相手は大変なものである。

夏海はくすりと笑いながら、残った一つのミニトマトを箸でつまんだ。そして慎重に、落とさないように宙に掲げる。その行く先は――

「ほら」

「…………」

伏し目がちで口を閉じていた優華も、しばらくして諦めたのだろうか。おずおずと、おもむろに、その紅色の瑞々しい唇を開く。口腔の奥には控えめな舌が覗いていた。その赤い中へ。赤いミニトマトを持つてゆく。嫌そうな表情をする優華にかまわず、無理やり箸をねじ込んだ。かすかなうめき声をあげる彼女に、私は満足そうに笑つてみせる。少し嗜虐的な表情だつたかも知れない。

箸だけ引き戻すと、優華は無言で口を動かしていた。時間をかけてかみ碎いたそれを、ごくりと胃に押し流すしぐさをする。ちゃんと食べたようだ。よくできました。

「……頬、赤いよ？」

「うう……」

嫌いな食べ物の後味に苦しんだからか。あるいは別の理由からか。優華の頬はほのかに熱を帯びていた。そして指摘をすると、余計に赤くなつた気がする。まるで熟れた果実のように。

ああ、やっぱり私はトマトが大好きだ――

目の前の少女を見つめながら、夏海はあらためてそれを認識して、ニッコリと笑みを浮かべるのだつた。